

自由民権運動に

影響を与えた

吉田健三



吉田健三肖像
〔山本条太郎
伝記〕より

明治5（1872）年には、健三は自由民権運動を擁護する東京日日新聞（現在の毎日新聞）の創刊に出資。新聞を通じて、板垣退助、後藤象二郎、竹内綱などと交友関係が生まれ、板垣の自由民権運動に資金援助しました。伊藤痴遊（元代議士）は、「健三氏は、金を出したり、その陰ながらの努力は大したものだ」と述べています。その後、様々な事業で成功し、横浜で有数の富豪となった健三ですが、明治22（1889）年、40歳の若さで亡くなります。当時11歳だった吉田茂に遺された財産は50万円（現在の金額で数十億円）にも上りました。

に入った」など県人を助けたり、助けられたりする様子が出てきます。このほか、福井藩士で、後に日本美術界に大きな足跡を残す岡倉天心の父親、岡倉覚右衛門が、生糸商「石川屋」を横浜で営んでいます。

このように、移り住んだ福井人の横浜ネットワークが健三に大きなチャンスを与えた可能性がります。福井を出た健三ですが、福井の仲間の力で大きな富を築き、自由民権運動に大きな影響を与えていったのです。

幕

末に貿易港として開港され、開国日本の象徴であった横浜。明治初期の横浜で大富豪になり、後の総理大臣吉田茂の養父としても知られる人物が吉田健三です。

健三は、嘉永2（1849）年、福井藩士渡辺謙七（後に吉田姓）の



吉田茂肖像（国立国会図書館蔵）

長男に生まれました。16歳の時に脱藩し、大坂で医学、長崎で英学を学んだ後、英国軍艦で密航、2年間留学します。明治元（1868）年に帰国後、「英一番館」ことジャーディン・マゼソン商会の番頭になり、商才を発揮。海外で身に付けた英語を駆使し、生糸や軍艦の売込みに成功しました。退職の際には、1万円（現在のお金で約1億円）のボーナスまで贈られたということです。健三は独立後、その資金を元手に醬油醸造をはじめ各方面の事業に手を伸ばしていきました。

健三の成功の背景を紐解くと、横浜での同郷人（福井県人）とのつながりが見えてきます。『山本条太郎伝記』では、健三は、丘陵を拓いて宅地となし、学校を新設し、社寺を創建するなど横浜開発に少なからず貢献した。：巨万の富を作ったが、資金の融通は同県人で横浜での成功者、上郎幸八（現在の越前市出身の実業家）氏に仰いだ。とか、三秀舎（印刷業）の創立者島連太郎（現在の越前市出身）は、明治17（1884）年頃、健三氏のもとに寄寓し、その紹介で佐久間貞一氏を頼って秀英舎（現在の大本印刷）

関連史料・ゆかりの地

横浜市開港記念会館 （石川屋跡）



横浜開港50周年を記念し、市民の寄付金により大正6（1917）年に創建された横浜市開港記念会館。幕末、その敷地では、福井藩のアンテナショップで生糸貿易商だった「石川屋」が商いを行っていました。ここから福井藩の特産品が輸出されていたのです。

〔住所〕横浜市中区本町1-6（JR京浜東北線・根岸線「関内駅」南口から徒歩10分）

参考資料等 長谷川郁夫『吉田健一』新潮社、山本条太郎翁伝記編集会編『山本条太郎伝記』